

彌塚上・十三塚遺跡

(中世居館址・十三塚)

昭和59年

宮田村土地開発公社

宮田村教育委員会



狐塚上遺跡出土和鏡 (1983, 12, 15)

狐塚上遺跡

序

この狐塚上遺跡は、伊那峡の西方約200メートルの山林の中にあり、大久保の集落を眼下に見下ろす景勝の地である。弥生遺跡として有名な狐塚はこの遺跡の南の裾に隣接している。

このたび、つつじヶ丘工業団地に続いて、この地を宮田村土地開発公社が工業団地として開発のため買収し、近く造成工事に着工のため緊急発掘となったのである。

発掘は昭和58年12月12日から約1ヶ月にわたって行われた。そして古代中世の居館址と遺物など多数が出土した。中でも和鏡は斯界でも類例が少なく貴重である。また江戸時代の開発といわれ、今は全くその姿を消した幻の用水井、丸山井の遺構がこの遺跡のほぼ中央やや南よりを東に蛇行して、落下井となって前河原地籍に注いでいることが判明したことは大きな収穫であった。

また十三塚遺跡は、中越諏訪神社の西北の雑木林の中にあり、大小十三の塚が東西に長く並列していた。今回道路工事のためやむなく、その内の5基が調査の対象となったのである。

ここにその報告書を刊行するに当たり、宮田村土地開発公社及び調査団長友野良一氏をはじめ、発掘の関係各位には、初冬の寒さの中を献身的なご協力を賜わり感謝に堪えず、心から御礼を申し上げる次第である。

昭和59年3月

宮田村教育長 林 金茂

例 言

1. 本書は、長野県上伊那郡宮田村、6031-1・6031-6・6031-8・6095-1・6104・6105・6106-1・7428、番地に所在する狐塚上遺跡の報告書である。
2. 本調査は、宮田村土地開発公社が工場団地造成に伴う埋蔵文化財包蔵地の事前緊急発掘で宮田村教育委員会が委託をうけて実施したものである。

発掘調査は昭和58年12月12日より昭和59年1月10日まで実施し、その後引き続き整理作業を行なった。

3. 本報告書の写真は、友野良一が撮影した。
4. 出土遺物中中世陶器については、瀬戸歴史民俗資料館長宮石宗弘・藤沢学藝員に、平安の羽黒鏡については代田敬一郎氏に、内耳土器については小木曾清氏にそれぞれ御教示をいただいた。
5. 本書の執筆は友野良一・古河原正治が行った。
6. 本書の編集は宮田村教育委員会が行った。
7. 本遺跡の遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

本文目次

序 文
例 言
本文目次
挿図目次
図版目次

宮田村教育長 林 金茂

第1章 遺跡の立地	5
第1節 位 置	5
第2節 自然環境	6
第3節 歴史的環境	7
第2章 発掘調査の経過	10
第1節 発掘調査に至るまで	10
第2節 調査の概要	10
第3節 発掘調査日誌	11
第3章 遺構と遺物	13
第1節 基本層序	13
第1節 遺 構	15
1 西 堀	15
2 東 堀	15
3 溝状遺構	15
4 第1号住居址（建物址）	19
5 第2号住居址	20
第4章 結 語	23

題 字

岩井 照夫

挿 図 目 次

- | | |
|--------------|---------------------|
| 1. 狐塚上遺跡 | 第9図 溝状遺構実測図 |
| 第1図 位置図 | 第10図 狐塚遺跡1号址実測図 |
| 第2図 遺跡周辺の地形 | 第11図 狐塚上遺跡1号址出土陶器 |
| 第3図 遺跡付近の遺跡 | 第12図 狐塚上遺跡2号住居址出土陶器 |
| 第4図 土地台帳付属地図 | 第13図 狐塚上遺跡2号住居址実測図 |
| 第5図 序層図 | 第14図 狐塚上遺跡出土土器 |
| 第6図 遺構分布図 | 第15図 狐塚上遺跡出土陶器 |
| 第7図 西掘実測図 | 第16図 狐塚上遺跡出土石器 |
| 第8図 東掘実測図 | |

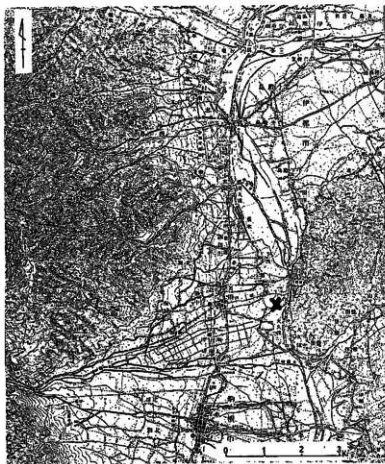
図 版 目 次

- | | |
|---------------------------|--|
| 図版1 西方より見た狐塚上遺跡 | 図版6 D-28和鏡出土状況
和鏡出土状態 |
| 図版2 北方より見た狐塚上遺跡 | 図版7 1号址(竪穴建物址)
第2号住居址(竪穴住居址) |
| 図版2 城上井の落込み
丸山井の末端 | 図版8 第2号住居址 焼土と木炭出土状況
第2号住居址 焼け残った柱 |
| 図版3 丸山井の大久部落への落口
西掘の一部 | 図版9 A-8・B・8グリッドと西掘の南端部
F-30グリッド遺物出土状況(縄文土器) |
| 図版4 東掘の発掘状況
東掘の北端の断面 | 図版10 狐塚上遺跡出土の陶器 |
| 図版5 東掘と土塁
溝状遺構 | |

第1章 遺跡の立地

第1節 位置

狐塚上遺跡は長野県上伊那郡宮田村大久保地籍の天竜川右岸段丘上にあり、木曾山脈駒ヶ岳に源を発する太田切川と、小田切川によって作られた駒ヶ原台地の東端に当る遺跡である。この遺跡に至るには、国鉄飯田線宮田駅より東南へ約2km、つつじヶ丘の工業団地に接しているのでわかり易い場所に所在する。



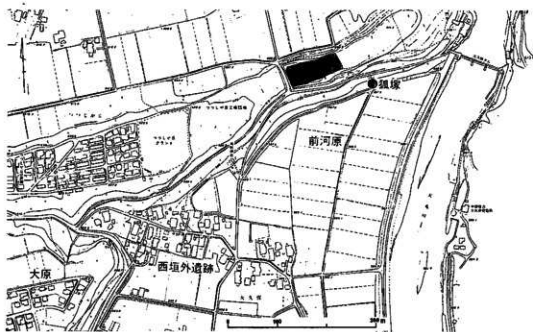
第1図 位置図

第2節 自然的環境

狐塚上遺跡は宮田村の南東大久保部落の北に当る。太田切川と小田切川の間にできた駒ヶ原台地の東端に近い位置に所在する。遺跡の東側250mには、天竜川の大久保ダムがある、おそらく太田切川の扇状地が形成される以前は大久保部落全体が、天竜川の河川敷であったものと思われる。

そのうち太田切川の過乗堆積によって作られた太田切扇状地が部落の南部から中部にかけ広がっている。大久保部落の北部は大田切の扇状地と同様駒ヶ原の三つ塚付近の凹地の湧水が集まって東流したのが大久保の堀割りの南の谷を作りそれが、大久保扇状地を形成した。こうした恵まれた自然環境のもとに狐塚遺跡（弥生時代中期初頭）から古代中世の文化が成立したものとおもわれる。

遺跡地の標高は613～614mにあり、大久保の狐塚は天竜川旧河床との比高は25m内外で、段丘下に添って湧水が豊富である。



第2図 遺跡周辺の地形

第3節 歴史的環境

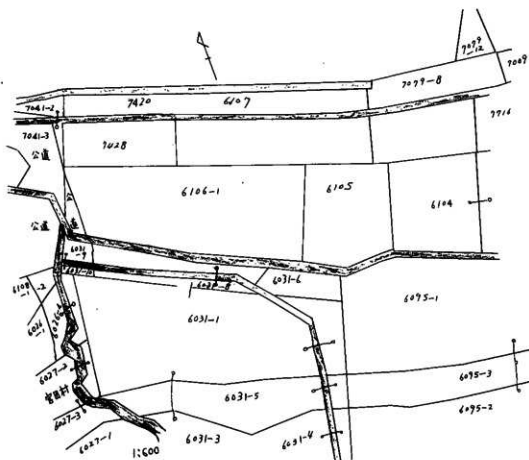
狐塚上遺跡は宮田村6106-1・6105・6104・7428・6031-6・6031-8・6031-1・6095-1、の山林に分布する。遺跡の範囲は東西250m、南北平均50m、その面積は12,500㎡にわたっている。今回は前述の地番の箇所を東西105m、南北20m 2100㎡の発掘調査を行った。

発掘前の遺跡は、一つには狐塚遺跡という弥生時代前期末～中期初頭に位置付けされる重要な遺跡が、周辺の遺跡図（第2図）に示されている場所にあるところから、おそらく、狐塚上遺跡はこれと深い関連をもつ遺跡であると考えられていた。分布調査で縄文中期後半の土器と打製石斧を採集していたことにより、調査を要する遺跡の一つとなっていたのである。いまひとつには、1980年の、「あみだ原遺跡」の調査において得た結果弥生時代後期座光寺原式に併行する住居址、平安時代後期の住居址が確認され、弥生時代の村、そして平安時代の村が存在



第3図 遺跡付近の遺跡

したことをつきとめたことと、井筋が東の方に伸びていることが確認されたが、この井がいかなる性格をもった井であるのか、つきとめることができず今後の研究によることとして調査は終ってしまった。あみだ原遺跡の発掘の成果が投げかけた宮田村における弥生時代の初現の問題。先に調査された中越分布確認調査のおり発見された102坑の条痕文の壺形土器の内部から縄文晩期終末の永式の新しい段階の小形壺形土器が伴出し、この壺形土器と小形変形土器との接触の時期的問題が論議されたことがあった。その後、二つや遺跡から堅王式土器～庄之畑式土器が発見され、弥生時代前期から中期初頭の遺跡が次第に明らかにされつつあるなかで、水神平式に近い時期の狐塚周辺の遺跡を調査する意味は大きい。また、あみだ原遺跡では、平安時代の後期の住居址が検出され、平安時代の村があった事実は認めることができたが、これらの村落の規模やそれに関連した遺構などが発見できなかったのは大変に残念であったが、問題はあみだ原遺跡の周辺の遺跡の調査の折、あみだ原遺跡で提起されたこれらの問題を解決されるなら幸いであると願っていたのである。



第4図 土地台帳付属図 (公図)

つつじヶ丘遺跡。つつじヶ丘団地は昭和40年からの宅地造成による団地であるが、当時は山林であった。そして遺跡にはあまり関心もなく注目もされずに工事が進められた。その後も団地の東側にグラウンドが作られたが、遺跡らしきものは発見できず終った。その後あみだ原遺跡を調査するに当って、村の人がグラウンドの一部に畑があり、その畑から土器や石器をひろったことがあると云う話を聞くことができたので、調査中につつじヶ丘に住われている二・三の人に聞いて見ると、時折住宅の畑などから土器や石器が出土したことがあったと話してくれた。おそらく、つつじヶ丘もあみだ原と同じ遺跡であったことが明らかとなったが今となっては致し方ないことである。

滝ヶ原遺跡（大原）本遺跡は昭和48年県が住宅団地として造成するに当り事前に調査が行われた遺跡である。縄文中期の住居址10軒と多くの土器・石器が出土し縄文中期の集落址であったことが明らかになった。また、古墳が二基存在したことも確認された。しかし、古墳時代の集落は、この附近には発見されなかった。これら古墳時代の被葬者の住居地は、おそらく、そお遠巨離ではないだろうと思われる。

駒ヶ原南遺跡、本遺跡は県営園場整備のために発掘調査された遺跡である。

この遺跡は天竜川に太田切川が合流する地点で太田切川より40mも高い段丘上に位置している遺跡であるが、その附近には駒ヶ原の南側の凹地つまり、滝ヶ原より大久保の中央に至る小谷の上流に当る湿地帯及びこの附近の台地が主体であって、その他に段丘下の広大な太田切川の扇状地にも生産源をもとめたように考えられる自然的環境にある。弥生後期の住居址3軒と同時代と考えられる方形周溝基3基が発見された。上伊那では辰野町樋口五段田遺跡と西春近南小出遺跡に発見されているにすぎない。また、本遺跡からは縄文前期初頭中越遺跡と同じ薄手指痕文の東海系の土器と、中厚手の中越式土器が出土した。そのほか住居址も検出され、中越遺跡の枝村として重要な位置をしめる遺跡となった。

西垣外遺跡、本遺跡は大久保扇状地に発見された遺跡である。この遺跡は耕作中住居址の煙道の一部が出土したことにより、土地所有者の好意によって調査された古墳時代後期の住居址である。上伊那地方ではこの時期にこれだけ完存した住居址の煙道ははじめてであり、滝ヶ原（大原団地）に確認された当時の村は大久保部落の西垣外遺跡ではないかと考えられ、宮田村での古墳時代の村を知る上で重要な遺跡である。以上狐塚上遺跡をとりまく諸遺跡について簡単にふれてみたが、今回の調査から、いずれの遺跡もけっして無縁ではないこと知り得たことは幸であった。

第2章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

本地区は、宮田村の基本構想の一環である工業振興による工業用地確保の該当地域となっており、昭和53年度つつじヶ丘工業団地の造成に伴う「あみだ原遺跡」の埋蔵文化財包蔵地の緊急発掘調査を行い、縄文時代中期・弥生時代後期の住居址、平安時代の住居址及溝状遺構等貴重な資料を得たことにより、あみだ原遺跡以外の個所にも遺跡は続くことを確認していた。今回この土地が、宮田村土地開発公社が計画している工業団地造成工事対象地区となったので狐塚上遺跡の緊急発掘調査が行われることになったのである。

発掘調査

宮田村教育委員会が、宮田村土地開発公社の委託をうけ、友野良一氏を発掘担当者として昭和58年12月12日～18日まで予備調査を行い19日より発掘調査を行って昭和59年1月10日まで調査を実施した。

第2節 調査の概要

1 遺跡名 狐塚上遺跡

2 所在地 宮田村6031-1・6031-8・6095-1・6104・6105・6106-1・7428番

3 発掘期間 昭和58年12月12日～昭和59年1月10日

4 調査委託者 宮田村土地開発公社理事長 伊藤 浩

5 調査受託者 宮田村教育委員会

6 調査担当者 友野良一 日本考古学協会員

事務局 林 金茂 (宮田村教育長)

春日千秋 (宮田村教育次長)

古河原正治 (社会教育主事)

平沢弘子 三好一夫

第3節 発掘調査日誌

○12月12日

本日より調査を開始する。発掘用具の整備、テントの設営、器材の搬入及びグリッドの設定等を分担して行う。

○12月13日

グリッドの杭打、遺跡の西側から東に向かって大久保側をAとし北側に向い2×2m、東に向っては1～50のグリッドを設定する。林教育長、開発公社田中哲尚氏が立合う。本日よりFグリッドを基準に調査が始まる。

○12月14日

各グリッドの調査は一人また二人で発掘、現地が山林であるため、木の根が多く調査はかどらない。

○12月15日

D-10グリッドからは打製石斧の破片、土器片が出土する。地表下わりあい浅い所に集石が発見される。本日測量の基準になるB・Mを設定するB・MはFグリッドラインにNa-1とNa-2を設けNa-1.613.00Na-2は613.70mとする。

○12月16日

F-8グリッドに砂の層が発見され北側G-8グリッドを調査したところまだ北側にのびることが確認された。Dグリッドの24に落込み、床面ではないか。

とみられる個所が発見される。D-28グリッドに和鏡が発見される。発見された位置は地表下45～50cm溝状遺構の上部に当たるところより出土した。

○12月17日

南側にグリッド調査を拡張する、仮B・Mの設定、遺物出土状況の撮影をはじめめる。調査グリッドの記録も行う。鏡の出土があったので伊藤浩村長、林金茂教育長、春日千秋次長、古河原主事、三好主事等の見学あり、VTRによる記録を行う。

○12月18日

東側のグリッド調査は一時中止して西側の未調査グリッドの発掘を行う。

○12月19日

F G H-8-9グリッドを北に向かって掘ると、底部が平で水が流れたらしく凹い個所に砂が堆積しているところより掘り形であることを確認する。このため南側A・B-8グリッドを調査したところ掘り形は続いていることが確認され南から北に向って傾斜している掘であることが確実となった。

○12月20日

A-8グリッド北側に掘と略同レベルの位置に幅1～1.5mの掘とは別な井筋らしい掘り形が発見された。この掘り形は西の方から東の方に続くようである。またAグリッドの南一段高い位置には丸山井が通っている。この掘り形は丸山井の下に発見された。一方第1号址の調査と溝状遺構の拡張を進める。

○12月21日

溝状遺構を南と北に掘り上げる。午後溝状遺構は、

大久保側に掘り抜けていることをつきとめる。第1号址は竪穴址であることも確認される。複土中から唐草文の瓶子の胴部破片が発見され中世の遺構らしいことが考えられる。昨夜の雪と雨でグリッドにかけたシートに水がたまったのを除く。

○12月22日

鏡の出土した溝状遺構拡張でH-28グリッドを止め北にI・Jのグリッドを除いてK-Lの段丘端M-Nグリッドを調査、溝状の遺構はN-28グリッドから北側に落ていることを確認した。

○12月23日

第1号址の調査を進める。

○12月24日

第1号址の床面を清掃し写真撮影を行う。1号址は柱穴を伴う建物址であるが、炉址を確認できなかったので住居址とすることはさけた。溝状遺構の清掃と断面を整備した。中日新聞社と駒ヶ根日報の記者の取材、三好・古河原岡主事VTRによる録画。

○12月25日

溝状遺構の実測と写真撮影を行う。D-34-36グリッドを掘り土壁の断面を確認する。根津清志氏の見学。

○12月26日

下平・田中両高校生と友野で溝状遺構を調査、凹に砂が堆積している箇所を拡張する。

○12月26日

D-37附近は以前から凹んでいて掘ではないかと考えられている箇所であるので、まず、この所より北側に掘り進むように調査を開始した。午後に掘の底部であることが確認された。掘より東にもグリッドを設け調査を進める。

○12月27日

昨日に引続いて東掘の調査を行う。午後南北の断面を測量する。掘より東側の調査も続行する。

○12月28日

東の堀の清掃と測量。午後は全員で片付けを行ない古河原主事が器材を教育委員会に運搬する。測量の残りを田中・下平両高校生で行う。掘の東のJ-47グリッドに焼土と床面らしき所を確認したがつい調査を続けることができなかった。

○12月29日・30日

全体の測量が完成していないので全測をはじめる。

○1月5・6・7日

遺物の整理 2号址手入

○1月10日

第2号址の再調査、中世陶器片木炭・柱穴が炭化して残在しているのを実測

○1月～2月

調査報告書の作成作業

第3章 遺構と遺物

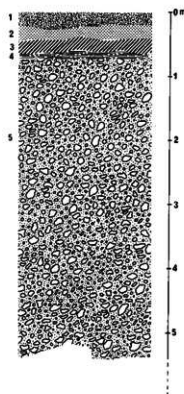
第1節 基本序層

宮田村は西は木曾山脈駒ヶ岳と東は赤石山脈の間に囲まれ、諏訪湖に源を発する天竜川の右岸段丘上にあたる。この天竜川右岸地域は、伊那谷特有の「田切地形」を形成しており、村はそのうち太田切川の扇状地に属している。今回調査の行われた「狐塚上遺跡」は太田切川と小田切川によって作られた駒ヶ原台地の東端天竜川に接した場所に位置する。

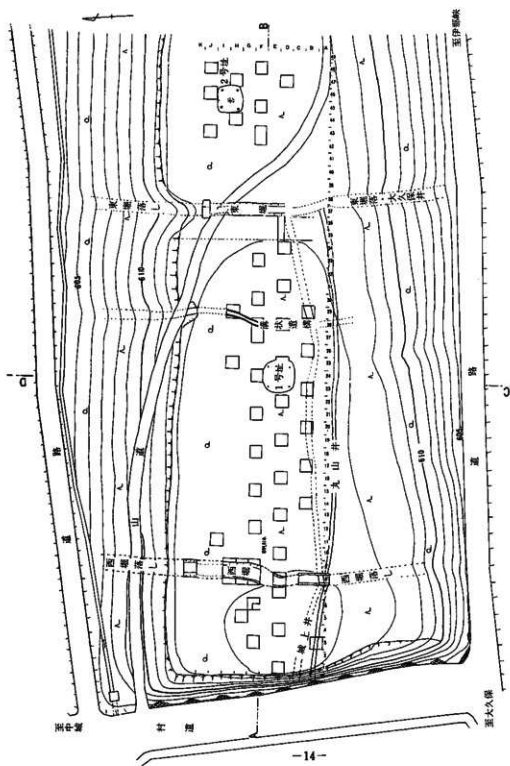
地質・層序

本遺跡の基盤をなす太田切川扇状地には、第三期の緑泥変岩・硬砂岩等の岩石が下層に推積し、上層に太田切川の岩石である斑状花崗閃緑岩・縞状片麻岩・黒雲母花崗岩等によって洪積台地を形成している。その最上部には新期ロームが堆積した地質構造である。

- 第1層……15～20cm 表土層
- 第2層……15～24cm 黒褐色土層
- 第3層……16～22cm 赤褐色土層
- 第4層……5～15cm 砂層
- 第5層……………転石混り砂礫層



第5図 層序図



第6圖 狐城上遺構分布圖

第2節 遺構

1. 西 掘

西掘は大久保から中越部落に通ずる道路の東の16m程の段丘上に位置する。発掘中F-8グリッド～G-8グリッドを調査中に発見された掘で、掘の南端はA-8グリッドからM-8グリッドにわたる総延長26m、幅平均2～3m、深さ80cm～1.2m内外を測る。南端はA-8グリッドの南で天竜川大久保側に掘り抜いている。また、北端はM-8グリッドで小田切川側に落している。現在掘抜跡はわずかではあるが、その痕跡をとどめている。掘はA-8グリッドを頂点として北と南に2～4度の傾斜をなしている。頂点の位置は後述するが、城上井の底部と合致している。このことは、「城上井」をこの掘に流したことを物語っている。掘底は多くの凹凸があるが低い所には砂が沈んでいたり、こぶし大～頭大の自然石が落込んでいる。遺物は覆土中より硬砂岩の打製石斧や、器種不明の削片が出土した程度であるが、掘の底部からは中世の陶器片が出土している。

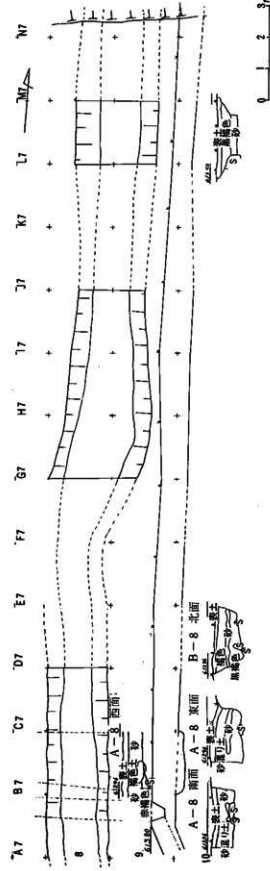
2. 東 掘

東掘は西掘の東56m A-37～M-37グリッドに発見された掘である。掘の形態は西掘と同様であるが、掘り上げた土砂は西側に盛り上げ土塁としたようである。掘は城上井の東端がD-37グリッドに至っている地点を頂点とし、南側は大久保側に落し、北側は小田切川の面に落している。掘の延長は約25m、上幅は1.6～3.5m内外で、深さは80cm～1.5m、掘底の幅は1m～1.2m丸底を呈している。壁は西面が緩く東壁の方がやや急である。壁面にはなんのこん跡も認められなかった。掘底面には水が流れたらしく、ところどころに砂がたまっていた。また、こぶし大～頭大の自然石も落込んでいた。掘の中からは遺物は発見できなかった。

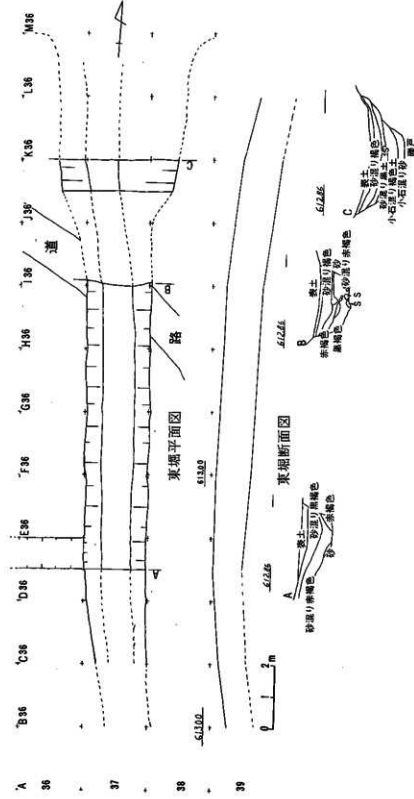
3. 溝状遺構

溝状遺構はD-28グリッドからK-29グリッドにいたる間に発見された遺構である。この溝状遺構より、鏡が出土している点注目すべき遺構である。鏡と遺構については後述する予定であるので、ここでは、溝状遺構について述べることにする。遺構の延長は24m、幅1.0～1.5m、底の幅50cm～1.0m、平らの面と円底の箇所がある。深さは1.0～1.5m、箱薬研状の遺構で、西掘や東掘とは異なった溝である。溝の北端には貯水場らしき凹い箇所が設けられ、砂が多く推積していた。この溝は掘とは別な目的をもって作られたもので、いまのところ、居館の用水ではないかと考えられるものである。

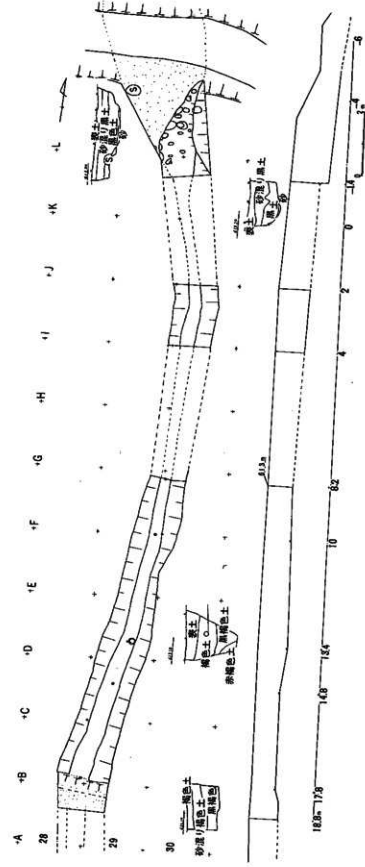




第7圖 孤梁上遺跡西偏南側圖

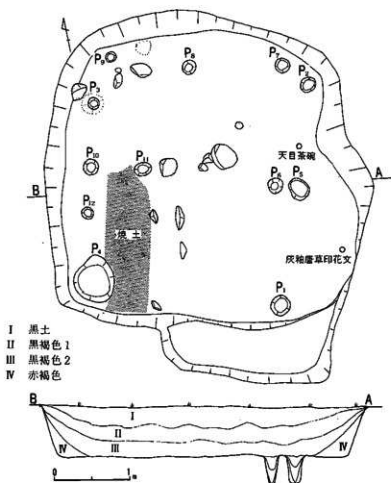


第8圖 東端平面圖



第9圖 溝坑遺構平面圖

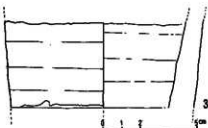
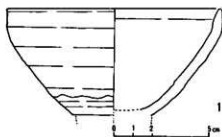
4. 第1号址 (第10図)



第10図 狐塚上第1号住居址実測図

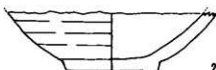
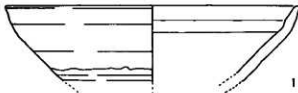
本遺構はC-23・24・25D-23・24・25E-23・24・25グリッドにまたがって検出された遺構である。現地表面は標高630m内外で、遺構の検出はローム層に切込んだ面で確認された。

遺構 方形を基本とした竪穴式の建物址である。遺構の規模は東西3.9m、南北3.7m、東側は10cm内外高く幅60cm長さ2m程張り出したところは出入口かと思われる部分である。床面は一部踏みかためられている箇所も見うけられたが、全体的には軟弱である。床面は北側がやや高く南の方向に傾斜している。床面上に発見されたP-4～P-11、にかけ巾60cm長さ2mにわたる焼土と木炭は、本遺構にかかわるものでなく後世においてのものではないかと思われた。P-1～P-4は支柱穴址で、5・8・10は補助穴と考えた方がよいと思われるものである。炉址は検出されなかった。遺物は床面上に天目茶碗、瀬戸15世紀前半、灰釉瓶子唐草文鎌倉期と考えられる陶片が発見



第11図 狐塚上第1号址出土陶器

1. 天目茶碗
2. 灰釉瓶子(フク土中)
3. 灰釉瓶子(フク土中)



第12図 狐塚上2号住居址出土陶器

1. 灰釉碗
2. 灰釉碗

された。

5. 第2号住居址 (第12図)

本遺構はH-45・46・45・46のグリッドに発見された住居址である。住居址の地表面の高さは612m、内外で遺構の検出はローム層に切込んだ面から確認された。住居址の形状は楕円形を呈した竪穴式住居址で、その規模は東西4.38m、南北4.07m深さ50~60cmを測る。床面は炉址の周辺がやや固く踏固められていたが、全般的には軟弱の方であった。炉址は中央やや西寄りに設けられ炉址の周辺までひろがっていた。柱穴はP-1~P-4で壁に接して設けられていて、その規模は内径で13~15cm直穴柱穴の底部は平面が多かった。特にP-3の柱は火災のため炭化状態で残存した。残存の状態で径は17.5cm、長さは26cmで円形で床面下に12cm、床面上に16cm残った。そのほか火災によっての炭化された材は覆土中より多く検出されているが、ま

とまって検出されたのはP-3~P-4の間に径16cm内外で長さ2mほどの松材の炭化材が焼落ちた状態で発見された。おそらく焼落ちた桁材ではないかと思われる。

遺物、出土した主な遺物は第1図の1は口縁部がやや立ちあがった黄瀬戸灰釉碗、口径15.6cm底部を欠いた陶器、2は、黄瀬戸灰釉碗の底部で1と同じ系統の陶器。時期は15世紀前半と思われる。

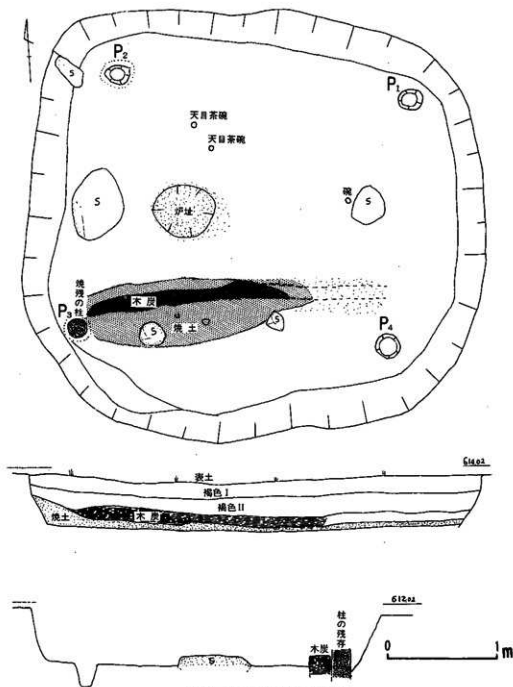
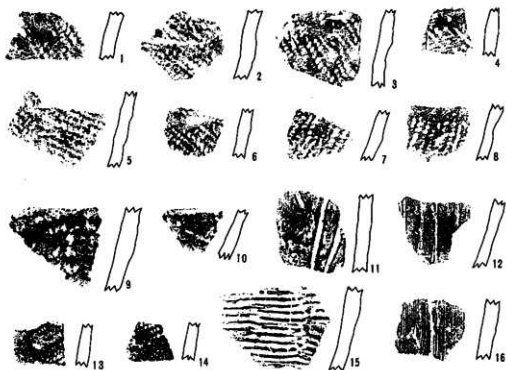
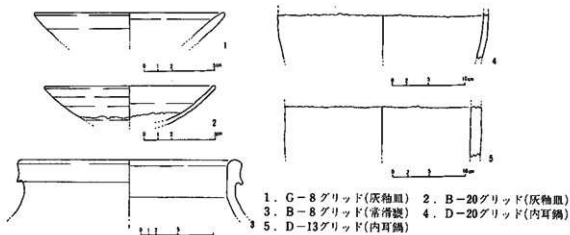


図13 狐塚上遺跡第2号住居址

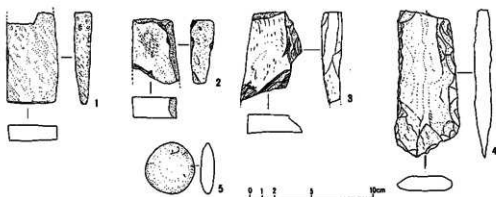
その他の遺物、(第14図) 1～9は斜縄文の縄文前期初頭に比定される土器、10もおなじ無文縄文前期初頭の土器。11～12は縄文中期後葉、13・14は縄文後期の土器片。15は弥生前期末～中期初頭の条痕文土器。16、刷目の土師器である。



第14図 狐塚上遺跡出土土器



第15図 狐塚上遺跡出土陶器



第16図 狐塚上遺跡（居館址）出土石器

1. 砥石 2. 砥石 3. 砥石 4. 打製石斧 5. ノコ石

結 語

狐塚上遺跡は、長野県上伊那郡宮田村大久保地籍に所在する遺跡である。遺跡の立地している場所は小田切川と天竜川によって侵食された舌状の台地に分布している遺跡である。遺跡の南側は天竜川のはんらん原に作られた灌田地帯に接し、弥生時代中期初頭の狐塚遺跡がある関係上、本遺跡はその関連性を考え、狐塚上遺跡と名命したいきさつがある。また、遺跡の西口は弥生時代後期と平安時代後期の阿弥陀原遺跡が分布しているところから、本遺跡もこれらの遺跡と何らかの関係をもっているものと考えられ発掘調査を実施した。

調査の結果 縄文時代前期初頭に比定される土器片、縄文中期末葉の土器等が検出されたが、これに関連した遺構はついに発見することができなかった。また、狐塚遺跡（弥生時代中期初頭）の遺構、遺物もついに発見することはできなかったが、狐塚遺跡に先行すると思われる条痕文土器が検出されたことにより、本遺跡が狐塚遺跡に先行する遺跡であることを確認したことは考古学上大きな意味をもつこととなった。

今回の調査で特記すべきことと言えば、中世の居館址が発見されたことである。この居館址の規模は東西90m、南北25m、面積2250㎡のごく小規模ではあるが、東西に掘をめぐらし、その中に建物址と住居址が確認された。第1号址竪穴址は完全な掘立建物で、出土物は天目茶碗15世紀。印花文瓶子は鎌倉時代のものであり伝世品と考えられる。第2号住居址は、東掘の東側に発見された四柱の竪穴式住居址である。この住居址は火災にかかったのか、住居内からは多量な木炭片と桁、梁と思われる材と、P-3は柱が根本の部分で焼残っていたことなど建物の材質・法量など知る上で貴重な資料を得た。

丸山井 この井筋は江戸時代に作られたもので、その性格等もよくわかっていなかったが、今回の調査において、この井筋の終末地点が確認され、減び行く丸山井の記録が一つ増えた。

城上井 城上井は昭和55年度阿弥陀原遺跡発掘の折使用目的の不明な溝状遺構が発見され、丸山井の古い井ではないかという考えもあったが、真に遺溝の性格はつかむにいたらなかった。

それが今回の調査で、居館に引いてきた城上井であることが、流束の東掘に達していることによって確認された。この城上井の水源は定かではないが、大久保扇状地を作った掘削の上あたりより引水したものではないかと推測される。宮田村の城館址に上げた「城上井」としては、下の段(小田切城)がある。また中越、下城・中越氏の居館は農協の南小田切川より引かれている。北の城は下牧部落の南大沢川より上げていることが、城郭の研究で明かになっている。宮田の城館址では、下の段(小田切氏居館)が鎌倉時代～室町時代と古く、続いて、狐塚上居館～下城・中越氏の居館、戦国前の北の城とうつり変っていったのではなからうか。

溝状遺構 A-28グリットからL-28グリットの間に発見されたもので、西掘・東掘とは変った遺構で、言わば「城上井」から分岐し城の用水と云う性質のものであろう。L-28には貯水地と思われる凹地が設けられていた。

和鏡 出土した和鏡は、径11.72cm、重量200g、縁の幅3.8mmの直角式で鏡師は、縁を脚ともよんでいる。界圈は鈕と縁との中間にある圓線で、鏡師はこれを「月の輪」とよんでいて半圓である。外区には松の葉を配している。鈕と鈕座、鏡を手にするには紐緒を結ぶところをいう。「つまみ」ともいう。紐座の経は1.8cm、この鏡は火災にあって紐座が欠損している。文様は鶴が二羽と松の枝葉から構成された「松喰鶴鏡」である。(友野良一)

圖 版



西方より見た狐塚上遺跡



北方より見た狐塚遺跡



城上井の落込み



丸山井の末端



丸山井の太久保部落への落口



西堀の一部(南から北)



東堀の発掘状況



東堀の北端の断面



東堀と土塁



溝状遺構



D, 28和鏡出土状況



和鏡の出土状態



第1号址(竖穴建物址)



第2号住居址(竖穴住居址)



第2号住居址、焼土と木炭出土状態



第2号址、木炭出土状態



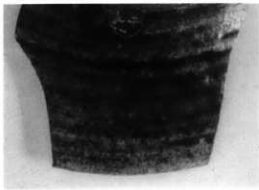
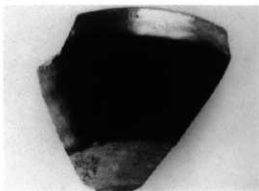
第2号址、焼けた柱



A-8・B-8 グリッドと西堀南端部



F-30グリッドの遺物出土状態



1. 1号址(瓶子) 2. 1号址(天目茶碗) 5. 2号住居址(灰釉碗) 6. B-26(灰釉钵)
3. 2号住居址(灰釉平碗) 4. 2号住居址(灰釉平碗) 7. 1号址(灰釉四耳壶) 8. C T-8(灰釉碗)

十三塚遺跡

程堂集卷五

例 言

1. 本書は、長野県上伊那郡宮田村7656・7659-1番地に所在する十三塚遺跡の報告書である。
2. 本調査は、宮田村が村道中越北線（西原26号線）の新設工事のため、埋蔵文化財包蔵地の事前緊急発掘を宮田村教育委員会が委託をうけ実施したものである。

発掘調査は昭和58年11月4日より昭和58年12月8日まで行い、その後引続き整理作業を行った。

3. 本報告書の実測は友野良一・下平博行・田中浩征・大田 徹、写真は友野良一・下平博行が撮影した。
4. 本書の執筆は、友野良一・春日千秋が行った。
5. 本書の編集は宮田村教育委員会が行った。
6. 出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

本文目次

例 言

本文目次

挿図目次

第1章 遺跡の立地	5
第1節 位 置	5
第2節 自然環境	6
第3節 歴史的環境	7
第2章 発掘調査の経過	10
第1節 発掘に至るまで	10
第2節 調査の概要	10
第3章 遺構と遺物	11
第1節 遺 構	11
1. 6 号 塚	11
2. 7 号 塚	12
第4章 ま と め	17

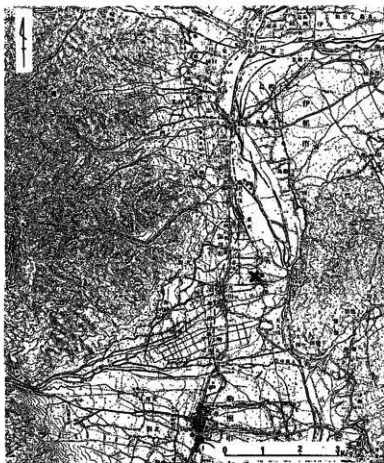
挿図目次

2. 十三塚遺跡	第5図 十三塚全体図
第1図 遺跡の位置	第6図 第6号塚実測図
第2図 地 層 図	第6図 第6号塚実測図
第3図 十三塚周辺図	第7図 第7号塚実測図

第1章 遺跡の立地

第1節 位置

十三塚遺跡は長野県上伊那郡宮田村中越と伊那市下牧地籍にまたがった、大沢川の右段段丘上に分布し、標高624～625m上に所在する塚である。国鉄飯田線宮田駅より東へ1.2kmに位置する。



第1図 遺跡の位置

第2節 自然的環境

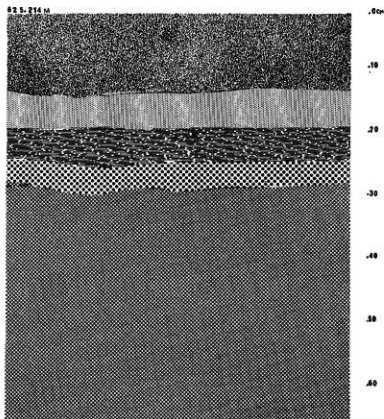
十三塚遺跡は中越諏訪神社の北にあたり、木曾山脈より流れいずる太田切川の支流大沢川の右岸段丘上から、中越北線にいたる地域、約2.5haに分布する遺跡である。遺跡地の標高は、623m～625mにあたる。遺跡の北を流れる大沢川との比高は6～8mを測る。今回の調査は中越諏訪神社より西45地点から十三塚まで147m、副頁9mが新しく作られる西原26号線で、調査はこの間、道路敷と十三塚8・9号塚の調査である。調査される箇所は道路基点625.64mで、それから北96.5m地点は624.82mと低く、古くは降雨時に雨水が流れたようである。西原の台地は一見平坦に見えるが、東北に2.5%の傾斜をなし、いく筋かの凹地が形成されている。この凹地帯に遺構が多いようである。

地層 1. 黒色土層

2. 黒褐色土層

3. 赤褐色Ⅰ層

4. 赤褐色Ⅱ層

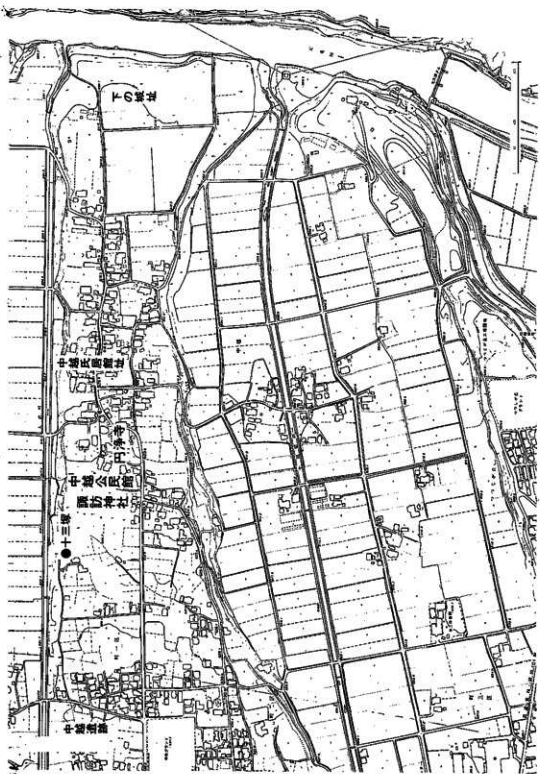


第2図 地層図

第3節 歴史的環境

十三塚遺跡は宮田村中越集落の西、諏訪神社の裏方から、北十三塚までの間に所在する遺跡である。この十三塚遺跡をとりまく諸遺跡及び城・城館址・神社仏閣について概略を述べると、

1. 十三塚遺跡の西に位置している中越遺跡は、Ⅰ区は「中越式」土器を出土する縄文時代前期初頭を代表する標式遺跡である。面積2ha余に分布する。
2. 中越遺跡Ⅱ区は、Ⅰ区に接している縄文前期と中期と混じるラインから、中越南線の間16haにわたり縄文中期を主に一部縄文後期・弥生中期を含む遺跡である。
3. Ⅲ区遺跡はⅡ区の南中越南線と小田切川との間にあり、東西に細長くその広さは約4haにわたって分布している遺跡で、一部中越第6次の緊急発掘をしたところ、縄文後期の環状集石遺跡であることが確認されている遺跡である。
4. 古墳時代・奈良時代・平安時代の遺跡については、現在のところ遺物は散見するが、遺跡は確認されていないのが現状である。
5. 中世の陶器を出土する所は、中越神社付近、中越氏の居館と考えられる周辺、大小路の南小田切川段丘上、下の城西付近、北の城周辺など近年その分布が次第に明らかになってきた。
6. 遺物は中世初頭のものは少ないが、南北朝頃から次第に多くなり、室町期になると急増する傾向がある。
7. 諏訪神社 中越部落の主な神社というと諏訪神社である。中越氏の氏神は諏訪神社であったのではないかと考えられている。中越郷に關係する資料は少ないが、「守矢文書」に嘉暦四年(1329)三月、鎌倉幕府は、信濃の諸郷に諏訪上社五月会、御射山祭の結番を定めている。その中に四番宮田郷、中越郷七番と中越郷の名が見える。14世紀前半頃に中越氏は地頭職にあったことはたしかである。中越の諏訪神社は14世紀前半には在立していたと思われる。
9. 圓浄寺 圓浄寺は浄土宗鎮西派で、開創は大永四年とされている。おそらく中越氏に古くは關係を持っていた寺ではないかと考えられる。十三塚も寺とかかわりあいをもっていたかもしれない。



第3図 十三塚周辺図

第2章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

本遺跡の調査は、本村が進めている西原開発事業の一部に当るところから、昭和58年度事業とし計画したため、埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の届を提出し、埋蔵文化財包蔵地にかかる事前調査を10月10日から実施することになった。

発掘調査

宮田村教育委員会は、宮田村から委託をうけ、友野良一氏を発掘担当者とし、昭和58年10月4日より準備をはじめ10月10日から発掘調査を行い、昭和58年10月31日現場の調査を終了した。

第2節 調査の概要

1. 遺 跡 名 十三塚遺跡
2. 所 在 地 宮田村、7079-1・768-1・7662-2・7662-1・7678・7656・7659-1・7670-1
3. 発掘期日 昭和58年10月10日から昭和58年10月31日
4. 調査委託者 宮田村村長 伊 藤 浩
5. 調査受託者 宮田村教育委員会
6. 調査担当者 友 野 良 日本考古学協会員
事 務 局 林 金 茂 宮田村教育長
春 田 千 秋 宮田村教育次長
古河原正治社教主事・平沢ひろ子・三好一夫・伊藤依男

第3章 遺構と遺物

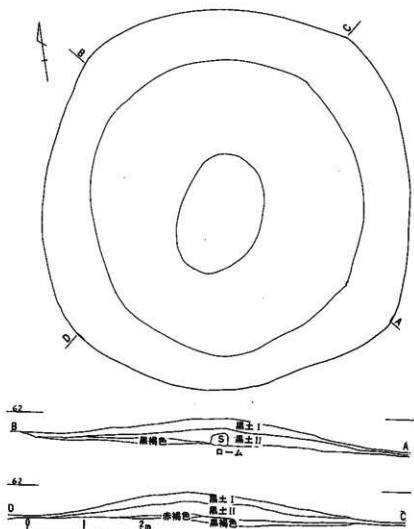
第1節 遺構

1. 第6号塚

本塚は十三塚中第6号の塚である。塚の規模は東西6.4m、南北6.63m、高さ50cm、不整円形の塚である。発掘調査は中央東西にベルト設け、上部より水平に掘り下げる。封土は断面図でみるように黒土Ⅰ中央部で18~19cm末端で6~8cmを測る。黒土層Ⅱは中央で28~29cm堆積している。

塚の西側の一部に厚さ10cm内外で幅3.0mにわたって黒褐色の層が発見された。おそらく築造時に別の掘取り箇所からの採土と思われる。

中央部の床面と思われる位置に30×20cm大の自然石が置かれていた。おそらく意識的に置かれたものと判断し



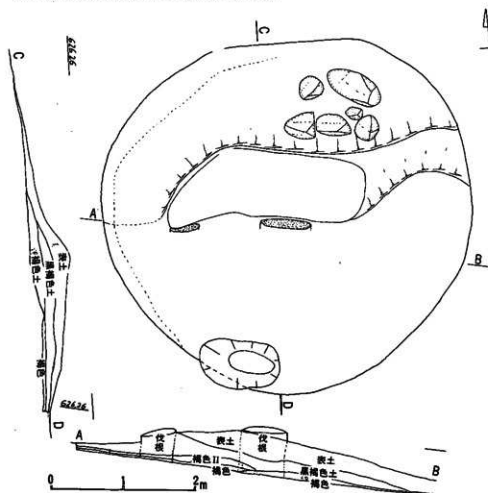
第6図 第6号塚実測図

てみたが、はたして十三塚と関係するものか今のところ不明である。遺物は時期不明土器片。
径1cmの鉛の玉1個出土したのみ。

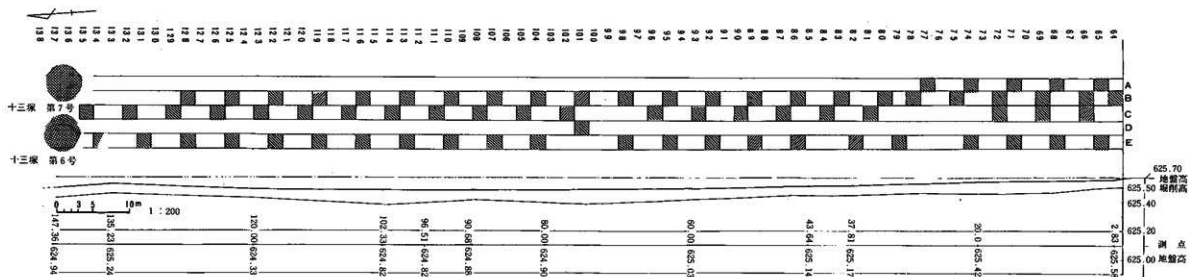
2. 第7号塚

第7号塚は、十三塚のなかでも東寄りの位置にある塚である。塚は付近を通っている道路で一部欠損していた。今回道路新設の一部用地内となるため調査となったのである。

調査は塚の性格を知るため用地外まで拡張して行われた。塚の現状での規模は、東西6.10m、南北58.2cm、高さ5.5cmを測る。調査方法は塚の略中心に東西、南北にベルトを設け、上部より水平に掘り下げた。塚の中央に伐根があったが、調査に支障が生じなかったので掘り取らなかった。塚の南側に1.10×70の浅い土壇が発見されさが、内部からは遺物は出土しなかった。封土の仕方も6号塚とまったく同じ状態であった。



第7図 7号塚実測図



第8图 十三线道路调查实测图

その他の遺構・遺物

十三塚第6号・7号のなかに、道路敷となる部分に2×2mのグリッドを72箇設定し調査を行った。その結果として、一見して地表面が平坦に見えるが、黒色上層下のローム層面は111グリッド付近が地表下40cmと浅いが、75・80グリッド・55～95・116～120グリッド付近は80～90cmと深い所にローム面があることが確認され、基盤にも相当の凹凸があることがわかった。このことは中越遺跡でもそうであったように、西原台地は東西に幾筋かの溝状の凹地があり、雨水が流れる程ではなかったため低い所に黒色土が堆積した地形であることが知られ、そうした所には遺構や遺物が多く発見されている。

道路敷地内より発見された遺物は調査表に示してあるように、土器片を出土したグリッド4、石器が出土したグリッド1、集石が9グリッド、土壊18グリッド、溝状遺構2、ロームマウンド1、ピットを出土したグリッド11、炭化物を出土したグリッド1等であった。住居址は今回の調査では発見されなかった。

第4章 ま と め

十三塚遺跡 今回調査された十三塚遺跡は、宮田村中越部落の北大沢川の右岸段丘上にあり、行政区画では伊那市と宮田村との境界に所在している遺跡である。

十三塚が立地している場所は、平地や平地に接する丘陵または河川の沿岸や山陵上に立地しているものもあり、その位置が村境とか峠などにあたる場所に多く見うけられる。大きさはすべて同形の場合と、一基だけが特に大きい場合がある。配列状態は一列に並ぶのが一般的で、大形のものが一基あるときは他の十二基がこれを取りかこむように配置されている場合もある。十三基の数は基本数で二組の十三塚を組合せたものや、他に6基を加えて配列したものなど例外がある。現在各地に存在し、特に地名として十三塚・十三原・十三峠などの地名が残ることがあり、その事例については、かつて柳田国男は、223ヶ所の例をあげている。十三塚は戦死者や殉死者を葬ったとする説もあるが、築造の起原などについては中世民間に広く行われた十三仏信仰に結びつける説、四臂不動尊を中尊とする十二天曼荼羅の十三仏を勧請築壇したとする説などがあり、築造に修験者が関係したといわれている。したがって十三塚には何等外部施設が施されていないのが多いが、石壇があるものもあるが、宮田の十三塚6号には立石という程ではないが石があったが、これが石棒的な意味をもっているかどうかは問題である。

今日まで、あまり内部構造について学術調査が行われた例は少ないが明確でないが、供養または奉養の遺物が存する以外、特殊な施設はないようである。なお十三塚が高塚をなして配列される関係上、今日でもしばしば古墳と誤認される場合がある。十三塚は歴史時代の民間信仰の土壇としての考古学上の対象ともなるものである。〔文献、柳田国男・堀 一郎（十三塚考）〕

今回調査された十三塚は、中越部落の民間信仰の遺構と考えられる。なお宮田村に隣接している伊那市東春近田原、山の庵南、下殿島古寺の東段丘上、中殿馬護国寺東段丘上、北沢バルブ工場南等に十三塚は存在している。いずれの十三塚もその付近に神社や寺が存在していることは注目されることである。十三塚の築造がこれら寺や神社とのかかわりのなかから生れたものであるのか、築造者が修験者であったのか、十三塚の研究にはなお多くの問題が残されている。

本報告書の作成にあたっては、宮田村建設課の皆さん、神奈川上川名昭先生、伊那市教育委員会飯塚政英氏等の多大な御支援に、紙上をもって心から御礼申し上げる次第である。

おわりに

十三塚遺跡は宮田村中越地籍に所在する。地理的には木曾山脈駒ヶ岳に源を発する太田切川の支流である大沢川の右岸段丘上に立地する遺跡である。

発掘は村道中越北線（西原26号線）の新設工事のため、事前に埋蔵文化財包蔵地の調査を目的としたものである。今回の調査は計画道路の方線上にある塚について行った。

これにより十三塚中5塚が破壊されたことになった。調査の結果からみると、出土品については特に見るべきものは少なかったが、数少ない出土物から推定し得るとすれば、戦国時代の鑄造にかかわるものでないかと思われる鉛弾ではないかとの報告を調査団から得た。

狐塚上遺跡は宮田村大久保地区の北、天竜川右岸段丘上、太田切川の支流、小田切川とに挟まれた舌状台地に所在する遺跡である。

発掘は宮田村土地開発公社が工場団地を造成するに先立ち、事前に埋蔵文化財包蔵地の調査を目的としたものである。今回の調査により、いくつかの貴重な賞物が出土したことは、考古学上また中世の宮田村の歴史を研究するうえで大きな成果であった。

特に平安時代の和鏡の発見は数多い宮田村の遺跡からの初めての出土であり、他の遺物の発見とあわせて中世の地方豪族の居館社と定義づけられた成果は特筆すべきものである。

なお本調査にあたって、宮田村、宮田村土地開発公社の御協力を得、特に友野良一団長をはじめとする調査団の、極寒の中での発掘作業に多大な御協力をいただき、貴重な報告をいただいたことに対し、筆足らずであるが心からお礼を申しあげる次第である。（教育次長 春日千秋）

版 圖



4 号 塚



5 号 塚



南から見た十三塚遺跡



発掘前の十三塚遺跡



山林を切開いた十三塚遺跡



発掘前の6号塚



発掘中の6号塚



6号塚から出土した石棒



6号塚出土の石棒



6号塚の最終の状況



6号塚の東面



7号塚発掘状況



7号塚の発掘状況



7号塚の最終状況

狐塚上遺跡

十三塚遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和59年3月 印刷

昭和59年3月 発行

発行 長野県宮田村教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
